

TS転生して配信者にな
った私が全力でゲー
ムをやる話

高田馬場

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲーム実況が好きな男がTS転生して配信者する話。

目次

その
1

1

その1

俺はゲーム実況が大好きだ。

子供の頃、貧乏だった俺はゲームを買う事が出来ず、ゲームをやりたいという欲をゲーム実況で満たしていた。

楽しそうに、けれども時には暴言を吐き出し感情のままゲーム実況をする実況者に憧れていた。俺も、いつかゲーム実況がしたいと。

そして大人になった俺は、環境を整えさあゲーム実況を始めるぞと意気込んでいた……のだが。

「まさか、ゲーム実況を始めるその日にトラックに轢かれて死んで、そのまま女の子に生まれ変わるなんて思いもなかったなあ」

前世と比べ、高くなつた声に低くなつた背、そして前世であつた『ナニ』が存在せず、前世でなかつた『おっぱい』が存在するという現実。

俗に言う、トラック転生という物を俺は経験して、俺は前世とは違う性別、女へと生まれ変わったのだ。

それからあれよあれよと16年の月日が流れ、今は花の女子高生というやつをやつて

いる。

今、改めて過去の記憶を思い返すと前世の俺が生きてた頃、小説投稿サイトではTSとしてゲーム実況とかいう謎のジャンルが流行っていたなあ……。

なんて事、この日の為に買ったゲーミングPCを見て思いを馳せる。

「ついに……ついにだ、ゲーム実況者としての人生が始まる」

前世と合わせ、40年目にしてついに、俺は、私はゲーム実況を始める事ができる。

思えばとても長い道のりだった。今世は前世と違いそれなりに裕福な家庭ではあったが、それなりに厳しい古風な両親なのでパソコンやゲーム機を買ってもらうのにとっても、とても苦労した。

だが買ってもらえば私の天下の始まりだ。

「ソフトは……問題なし。キャプボも大丈夫」

機材を一通り確認し、問題が無いことを確認すると高鳴る胸を押さえながら配信を始める準備をする。

動画投稿サイト、『ニツカリ動画』

昔は人気をかくした大手動画投稿サイトだったけど、今では他のサイトに視聴者を取られ悲惨な過疎サイト。

ランキングにはホモビデオをネタにした動画しかないぐらいに終わっている所だけ

ど、前世でよく見ていたサイトに似ていたのでここで配信する事を選んだ。

ついに、幕を開けるのだ。ゲーム実況者としての人生が。

その事実にも胸が震える。

PCの画面に表示されている配信開始ボタン。それを恐る恐る、噛み締めるように私はクリックした

「あー……あー……聞こえますか？」

なんて事を呟いてしまうが、無名の配信者がいきなり配信を始めた所で人が来ているはずもなく、呟いてからやらかした。と思い顔が赤くなるのを感じる。

「なーんて言った所で私以外いないんですけどね！ あはは……ん、あれ？ いるっ！

七人いる！ 閲覧七名様いらっしやい！！ こんな所にわざわざお越しいただきありがとうございます！」

画面に表示される閲覧七名の文字に心が高鳴る。

初めての配信、初めての視聴者に気分が高揚し、テンションが上がる。

『はじめまして、声かわいいですね』『こんな過疎サイトに新しい生主とか珍しいな』『顔出ししろ』

「わあ、一気にコメントが……ふふん、声かわいいでしょう？ そんなかわいい声の私がこの過疎サイト、ニツカリ動画の救世主になろうと思いやって参りました。後は顔は出

しません。ゲームだけ見に来てくださいね」

そしてコメントも貰い、ついに気分は最初からクライマックスなぐらいに上がっていく。

『なにをやるんですか?』『イキってるな』『声的に若そう』

「なにをやるんですか? そうですね、流行りに乗ってバトロワ系とかやって行こうかなと思っただんです……が、やっぱり初めての放送なので自分がやりたいゲームをやるうと思います。それにバトロワ系はあまり得意じゃありませんからね……と、そんなわけで、初回のゲームはこちら!」

画面に映るのは『ペケットモンスター』と呼ばれているどこかパチモノ感があるゲーム。この世界ではそれこそ前世のポ○モン並に人気があるゲームであり、今回プレイするのは初代。

『なっつ。しかも赤バージョンじゃん』『青版にしろ』『最新作でレート戦やれ』『ペケセン縛れ』

「ペケセン縛れ……ペケセンは縛りません。ですが普通にやる気はありませんよ?」

だって普通にやるとつまらないじゃないですか……と、コメントでも書いてある通りペケモン初代は色々バージョンがあるですよ。赤、青、橙、緑……私は赤しかやった事ないんですけど、他のバージョンもやりたいじゃないですか。でも、時間が無いと難

しい……な、の、で！ 一気にクリアする方法を考えました！」

『話長い』『はよやれ』『つかどうやるつもり？』

私は、ただの女生主として終わるつもりはない。ゲーム実況者として大成したい。

だからこそ、私は前世で有名だった実況者達を模範し—— 駆け上がる。

「この一本のコントローラーを使って、ポケモン4画面同時にプレイしてクリアしたい
と思います！」

『は？』『!』『?』『どういう事!』『期待の新人現る』

そんな、画面に映る四つのポケモンと共に、視聴者達の困惑した様子をコメント越しに感じる。

そりやそうだ、一本のコントローラーで4本のゲームを同時にプレイなんて正気の沙汰じゃない。でも、前世ではそれをやった実況者がいた。

私は、ただの萌え声生主で終わる気なんてサラサラないし女である事を武器にする気もあまりない。

単純に私は、ゲームが、配信が大好きだ。だからこそ、だからこそ——

「さあて、猫被りは終わりだ。おいテメエらに見せてやるよ、私がそんじよそこらにいる
投げ銭目当ての女生主じゃなくて、ゲームが大好きな実況者だって事をなあ！」
クソみたいな女生主共とは違い、ゲーム実況者としてトップを取ることをこの日、私
は誓ったのだった。